

見方・考え方を働かせ、 学びを深める授業の在り方を探って

研究推進部

1. 研究主題設定の理由

令和4年度4月に実施された全国学力・学習状況調査問題から見える児童に付ける資質・能力は、柏崎ステップアップ学びプランの中の「育成を目指す資質・能力の3つの柱」のひとつ『未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力』と合致している。国語、算数、理科のいずれの内容を見ても、ひとつの答えを基にして次の課題へと向かう問題が出題されており、次から次へと起こる新たな課題に向かい合い、粘り強く繰り返し考える力やそれを解き明かそうとする主体的な態度が必要とされていることが分かる。

昨年度の当校の全国学力・学習状況調査では、国語において、問題と条件を解釈し、説明・表現する力に課題が見られた。算数では、記述して説明・表現する問題について、正答率が低い結果であった。12月に実施した総合学力調査の結果でも、思考力・判断力・表現力が当校の児童の弱みとして課題となっている。また、児童アンケートでは、「授業中、話をしっかりと聞き、勉強している」の項目について肯定的に評価する児童が90%と、高い評価だった。一方で「授業中、自分の考えを話している（ペアで、グループで、みんなの前で）」の項目については、肯定的な評価が77%という結果となり、自分の考えを授業の中で表出しきれていない児童の実態がうかがえる。

これらのことから、児童が考えを書いたり説明したり、他者の考えを聞いて自分の考えを練り上げたりして、学びを深めるには、その教科・領域の見方・考え方を働かせることが鍵となるだろうと考えた。そこで、今年度の研究主題を「見方・考え方を働かせ、学びを深める授業の在り方」と設定した。また同時に、どの児童も分かりやすい、学びやすい授業づくりを推進するために、授業のユニバーサルデザインを整えることにした。このことが、学びを深める授業づくりに大きく関わっていると考え、実践を進めてきた。

2. 研究内容

今年度は、児童が「見方・考え方」を働かせて学ぶ

授業づくりを意識して、各自が深めたい教科の授業実践を進めてきた。以下にその視点を示す。

①「見方・考え方」を引き出す問いづくり

児童が「知りたい」「考えたい」と課題解決の意欲が高まるような魅力ある問いと提示の仕方を工夫する。

②考えを交流させる授業展開

考えをどのように発表させるか、どのように集約するか、どんなかかわり合いが必要か等を児童の姿から考え、授業をコーディネートしていく。児童対教師の一问一答ではなく、児童同士がやりとりしながら学ぶ授業を目指す。

③「見方・考え方」を鍛える発問

身に付けた資質・能力（知識）を活用・発揮する学習活動を設定する。考えを練ることができる発問を工夫する。

3. 授業の実際から

(1) 2年生算数科「長さ（1）」

◇ 研究主題とのかかわり

小学校学習指導要領解説算数編には、数学的な見方・考え方について、「事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考え、統合的・発展的に考えることである。」とある。本単元「長さ」では、身の回りにあるいろいろなものの長さを実際にものさしで測定する活動を通して、長さの意味を理解し、測定の考え方や技能について実感的に身に付けさせる。授業者は、知識や技能の習得に終わらせず、児童の思考のプロセスや考えの根拠を引き出すための手立てを立て、児童の曖昧だった考えが明確になったり、深まったりする授業を追究した。

◇ 成果

①「見方・考え方」を引き出す問いづくり

クッキーを目指して歩くありの道筋について、パワーポイントを活用し、ストーリー仕立てにして問題を提示した。このことで、児童は加法が適用できることに気づき、cmとmmの入ったたし算はどのように解けばよいのかという本時の課題を見通すことができた。

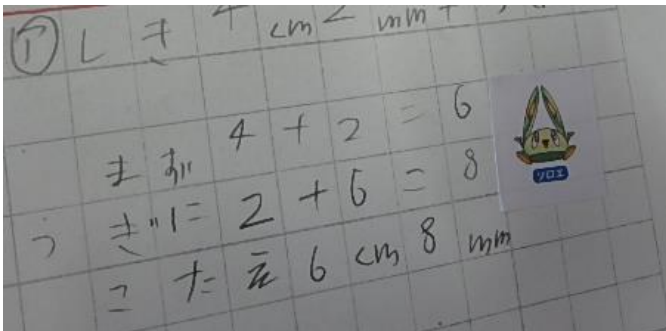
②問い返して思考と表現を深める

「Aさんの考え、言える人?」「この続きをどう説明すると思う?」「なぜ、こう考えたのかな?」「この考えのよいところはどこかな?」などと、児童の考えの意味や根拠、よさを引き出すような問い返しをすることによって、曖昧だった児童の考えを明確し、答えを導くまでのプロセスを明らかになっていった。

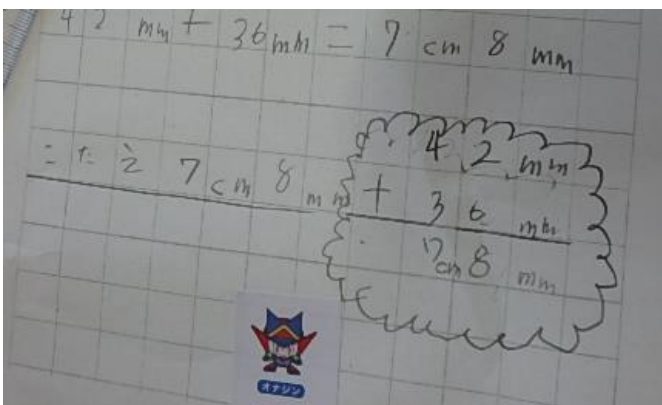
③算数の考え方モンスター」で数学的な見方・考え方を養う



教科書の「算数の考え方モンスター」は、算数の学習の中で繰り返し用いられる代表的な見方・考え方を9つにまとめたものである。長さの加法の方法について考え、自分の方法に合う「算数の考え方モンスター」を選び、モンスターシールを貼る。この自己決定する活動が有効に働き、自分の方法を見直しどんな考え方を使ったのか意味付けをすることができた。



「cm同士、mm同士を計算するから『ソロエ』だね」



「たし算の筆算と同じ方法でできるよ」『オナジン』

その後、ワッセル、ソロエ、オナジンが、「cmとmmを分けること」「単位をそろえること」「たし算の筆算と同じ考え方を使うこと」であるという見方・考え方を共有する場で有効だった。

④見方・考え方を鍛える活動で深める

「深める」場面では、繰り上がりのある長さの加法に取り組んだ。繰り上がりがあることで、「難しそう」という声が上がったが、「cmとmmを分ける」「単位を

そろえる」「既習の筆算と同じ考え方を使う」という考え方をを使って、解くことができた。考えたことを生かして、更に進んだ問題に取り組むことで、より理解が深まる児童の姿が表出した。

◇ 課題

本時では、授業者を介して児童の発言や考えが共有され、長さの加法に必要な見方・考え方が明らかになっていった。一方で、児童が考えをやり取りし、分からないことを伝え合い、解き明かしていく力は、発達段階に合わせて備わってほしい力である。児童同士の主体的な意見の交流の場を取り入れていくことが今後の課題である。

(2) 1年生国語科「しらせたいな 見せたいな」



生活科で飼育している「やぎのみいちゃん」を保育園の子どもたちに知らせるといふ相手意識を明確にし、書く活動に取り組んだ。観察メモを「見たこと」「触ったこと」「その他」の視点でYチャートに整理しながら共有することで、様々な事柄が表出し、児童の書きたい気持ちも高まっていった。授業者が作成した短文の間違いを指摘し合うことを通して、文を書くときのポイントを共有し文章作りに取り組んだ。授業者が児童の発言を受け取め、「どう思う?」「〇〇さんの言っていること、説明できるかな」というように切り返して発問することが、児童の考えを引き出すことにつながると確認できた。

(3) 4年生外国語活動「アルファベット」

本時では、活動のねらいを「アルファベットを用いた英語表現のやりとりを通して、より良い表現の仕方に気付き、会話時に生かす力を高める」とした。学習過程「深める場面」でより良い表現の視点(①表情②ジェスチャー③アイコンタクト)を授業者と確認し、再度アクティビティー活動に挑戦すると、相手の顔をのぞき込んだり、「I go it!」と元気に答えたりして、相手に伝えるための工夫を意欲的に試す姿が表出した。定型の会話文をよりよくする方法を考えることで、

外国語でコミュニケーションをとる楽しさが加わっていった。



(3) 6年生国語科「やまなし」



授業者は、宮沢賢治の他作品『なめとこ山の熊』『雨ニモ負ケズ』『よだかの星』と賢治の生涯をまとめた『イーハトーヴの夢』を根拠とし、それらを関連付けながら『やまなし』を読解する構想を立てた。学習支援ソフト（ミライシードのムーブノート）を使って友達の疑問や考えについて質問したり、意見を述べ合ったりすることが、「やまなし」の主題を理解するのに有効に働いた。賢治の作品を読み込んでいることで、作者の人物像と繋げて「やまなし」に込められたメッセージを話し合い、考えを広げたり、洗練させたりする姿が以下のように表出した。

- 賢治の伝えなかったことは、人生は怖いときや苦しいときばかりではなくて、嬉しいとき幸せなときもあるということだと思いました（H児）
- 賢治の理想は、人間も動物も植物も互いに心が通い合う世界だったので、賢治の思いのこもった贈り物が「やまなし」だと思う。（A児）

個の読み取りを全体に広げ、本時のねらいに迫る発問によって更に考えることで、作品の主題の意図を深く考えることができた。

4. 成果と課題

◇ 成果

今年度の実践や協議において、成果と言えることは大きく2つ挙げられる。

まず、「見方・考え方」を引き出す魅力ある課題が、児童の意欲を高め、思考を活性化させるということである。多様な考え・意見の相違が表出するような課題（6年国語「やまなし」）、誤答を提示したり、迷いのある場面を作ったりして、どうするとよいのか話し合う課題（1年国語「しらせたいな みせたいな」）、ゲーム性をもたせる課題（4年外国語「アルファベット」）などにより、主体的に学ぶ姿になっていた。

次に、「見方・考え方」を鍛える発問の有効性である。授業の山場となる「深める」場面で、この発問をすることが多くの授業で見られた。「では、この考え方で次の問題（活用問題や発展問題）が解けるかな」、「作者のつけた題名の意味って何だろう」等、児童がこれまでの学びを振り返り、更に考えるための発問が、個の考えを深めることに有効に働き、児童の学びの満足感を高めていた。

◇ 課題

一方で、課題として挙げられることは、考えを交流させ共有化を図る場の工夫である。このことについては、実践を継続し、様々な方法を模索し、研修していくことが必要である。学習支援ソフトを通じた意見交流を効果的に取り入れていくこと、思考ツール等を活用し児童同士がやり取りすることを通して、児童が能動的に学ぶ授業を授業者それぞれが実践していくとよい。授業者がファシリテーターとなり児童が考えを繋ぎ、理解を深めていくような授業が展開できるとよいのではないだろうか。

◇ 今後に向けて

また、授業を支える素地として、今年度は授業のユニバーサルデザインを整えることに取り組んできた。授業展開の過程については、「①つかむ・見通す」「②考える」「③深める」「④振り返る」の流れは、児童の思考に沿った大まかな流れになっていたように感じている。今後、日々の授業の中で一人一人の授業者が意識して実践を重ね、その効果を検討していくことがよいだろう。

今年度の成果と課題を基に研修を進め、更に「習う」から「学ぶ」へと学びのカタチを変容させていきたい。

